



TITLE:

# 日本資本主義成立過程の一考察 (新年特別號)

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

---

CITATION:

堀江, 保藏. 日本資本主義成立過程の一考察 (新年特別號). 經濟論叢  
1936, 42(1): 181-197

ISSUE DATE:

1936-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130724>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號 第 四 十 二 卷

昭和十一年一月一日發行

## 新 年 特 別 號

恩給年金賞與の課税	法學博士 神戶正雄
經濟社會學の概念	文學博士 米田庄太郎
費用としての勢力	文學博士 高田保馬
幕末諸藩の開國思想	經濟學博士 本庄榮治郎
經濟學史の基本問題	經濟學博士 石川興二
產蘭處理問題	經濟學博士 八木芳之助
表式調査に就いて	經濟學博士 蜷川虎三
戰前戰後の獨逸社會事業	經濟學士 中川與之助
原料仕入に於ける基本問題	經濟學士 大塚一朗
利潤論の修正	經濟學士 柴田敬
支那の幣制改革と其の意義	經濟學士 松岡孝兒
日本資本主義成立過程の一考察	經濟學士 堀江保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量	經濟學士 中谷實
再保險の發展と保險企業結合	經濟學士 佐波宣平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解	經濟學士 白杉庄一郎
商業機能學說の發展	經濟學士 堀新
臺灣の酒專賣	經濟學博士 汐見三郎
國民主義者の私企業觀	經濟學博士 作田莊一
植民地再分配論の種々相に就て	法學博士 山本美越乃
貿易商品の集中性と分散性	經濟學博士 谷口吉彦
我が國の銀行預金	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

# 日本資本主義成立過程の一考察

堀 江 保 藏

## 一、序 言

江戸時代特にその中期以後に於ては、貨幣經濟が發達し、町人階級の勃興となり、階級區別の混亂を生ずるに至り、土地經濟を基礎とする封建制度は崩壊せざるべからざる運命にあつた。此事は、換言すれば、資本主義經濟の生育すべき母胎が、既に江戸時代に存してゐたことを意味する。併し乍らそこには資本主義經濟の成立を阻むが如き二三の事情があつた。

即ち先づ、江戸時代には商業資本主義が高度に進展し、或種の産業にはマニファクチュアの如き經營形態も出現したが、この商業資本主義の進展は、武士階級を排除するよりも、寧ろ幕府及諸侯との密接なる關係に於てなされたものであつた。従つて經濟力に於ては町人に屈服せざるを得なかつた武士階級も、政治的には未だ多分に支配力を有し、其結果町人の經濟的活動には、この方面に於て一の限界があつた、この限界の一つは町人對武士の取引關係そのものにも存した。即ち大商人階級の蓄積せる富の主なる利用方法は、武士階級に對する貸金であり、従つて町人階級の繁榮それ自身が武士階級が存在を前提とせるものであつたから、江戸時代の町人就中富豪町

人にとつては、封建制度の打破は同時に町人自らの自殺を意味した。<sup>1)</sup> 此外封建社會の常として傳統尊重の念強く、累代の家業は成るべく之を固守して新規の事業に着手することは嫌はれたが、此事は大町人には特に著しかった。要するに鎖國政策其他の封建的諸政策によつて、商人の活動範圍は質に於ても量に於ても制限せられ、また階級觀念鞏固にして武士階級はあく迄上位に立つものと一般に意識せられし結果、貨幣經濟の進展によつて折角その飛躍的活動の機會を與へられた町人階級は、遂にこの機會に乗じて資本主義經濟を實現し得なかつたのである。幕末に諸港が開港せられ外國貿易に従事し得ることゝなつたが、併し之によつて十分に驥足を伸し得る以前に明治維新が到來したのである。

然らば斯の如き基盤の上に如何にして資本主義が成立したか。資本主義經濟とは要するに、企業利潤及び利潤を生すべき企業そのものゝ擴大を指導原理とする經濟の仕方であつて、茲では企業主體が非人格化すること、具體的には會社企業の發達が重大なる要素をなしてゐる。而して資本主義的經營はあらゆる産業部門に行はれ得るが、流通部門に關するものと生産部門に關するものとの間には、一般に發展段階の相違がある。即ち流通部門に關するものは比較的に商業的色彩多く、從つて商業資本又は利貸資本が産業資本に轉化する場合には、この部面への轉化が比較的容易である。之に反して生産部面に資本主義化が行はれ得るためには、その前提條件として市場の形成、勞働者の發生、生産技術の發達を必要とし、從つて右の轉化は、流通部門に關するもの

1) 高橋龜吉氏著、増補改訂日本資本主義發達史、36頁

程容易ではない。それ故に産業の資本主義化に段階の存することは、各國に共通するところであるが、いづれにしても資本主義經濟成立のためには、資本化し得べき富及び企業精神が必要であり、特に工業資本の場合には、生活資料及生産手段を有せざる勞働者、企業を大規模に經營すべき技術、並に市場が必要である。以下我國に於て此等の條件が如何にして整へられたかを主として明治十七八年以前に就て考察しよう。

## 二、企業資本

日本資本主義成立過程に於ける企業資本の源泉としては、江戸時代に蓄積せられた商業及利貸資本、封建領主が農民より收納して蓄積せる富、明治新政府がその財政的活動によつて調達せる紙幣・公債金及租稅收入を考へることが出来る。

(一) 商業及利貸資本　商業及利貸資本の蓄積過程に就ては説明を要しないが、明治維新に際してその蓄積の一部は回天事業成立の物質的基礎となつた。明治新政府は町人及豪農によつて蓄積せられた此等の富を利用し得たればこそ、殊に全國の富の七割迄が存したと稱せらるゝ大阪の財力を入手し得たからこそ、成立することが出来たのである。併しこの爲めに、幕末明治初年の經濟界の混亂と相俟つて、富豪の疲弊には頗る大なるものがあつたが、向はその富は全然用ひ盡されたわけではなく、そこには多くのものが残されてゐた。其上、後に述べるが如く、諸侯に對

して債權を有せしものは、新公債及舊公債の交付を受くることによつてその債權を確保せられ、此點よりしても町人の富は莫大であつたといはなければならない。尤も注意すべきは、此等の富が自發的に換言すれば町人自らの企業心によつて、産業資本に轉化したかどうかといふ事であるが、之に就ては後述する。

(四) 封建領主の蓄積 封建領主(幕府をも含めて)の財政は、時代の經過と共に窮乏し、これを補ふに租税の重課・藩札の發行・町人よりの借入れ・國產物の專賣・御用金の課徴等を以てせる有様であつたが、併し兎に角も二百數十年間彼等の存立を支へた。其上若干の雄藩に於ては幕末に至つて諸々の新經濟政策を行ふことが出來た。特に新經濟政策を行ひ得たといふことは、諸侯の財政に現實的にか或は潜在的にか若干の餘裕の存せしことを示してゐる。殊に佐賀藩に於ては、一般政費は田租のみを以て經理し、小物成一切は擧げて之を軍資金として内庫に於て貯蓄し(所謂御手許金、一般政費への流用を許さざる仕組を嚴守したため、幕末に至つてはその蓄積は相當の巨額に上つたと稱せられてゐる。<sup>2)</sup>この財政上の餘裕、根本的には領民よりの收納物の蓄積を以て、幕末に於て既に資本主義的事業が行はれたのであるが、明治に入りて後も、それが資本主義的企業の資本的基礎となつたところが少くないと考へられる。それは兎に角として諸侯及一般武士階級が明治政府より受けし金祿公債等の基準は、藩制時代の祿高にあつたのであるから、この點のみに就て見るも封建領主の農民よりの收納が資本蓄積の一過程であつたことを知る事が出来る。

2) 江頭恒治氏、佐賀藩に於ける洋式工業(日本經濟史研究所編、幕末經濟史研究、72頁)

(註) 藩の財政と藩主の家計との關係は、幕末及維新後の諸侯の性質を知る上に於て重要な課題であると思ふ。特に維新後に於て舊諸侯は諸々の新企業に關係してゐるが、それは金祿公債のみを基礎としたものであるかどうか。この點よりすれば江戸時代に既に藩財政と領主の家計とが別のものとなつてゐた藩があり(例へば佐賀藩)、家計は藩財政程窮乏してゐたのではないやうに思はれるのであるが、之について未だ確言し得ざるを遺憾とする。

(八) 政府紙幣 明治政府は財政上窮餘の一策として、元年五月に太政官札(四千八百萬兩)、二年十月に民部省札(七百五十萬兩)を發行し、その流通を促進する手段として之を諸方面に貸付けた。例へば各府藩縣に石高割貸付を行ひ以て殖産興業資金に充てしめしが如き、或は爲替會社資本金の一部に加へしめたるが如きそれである。政府は更に四年十二月の布告によつて、太政官札・民部省札並に藩札を回收する目的を以て新紙幣を發行した。此等の紙幣は、一時價值の低落によつて流通を阻害した場合もあるが、一般的に見て明治初年の經濟界に多くの貢獻をなした。様式・價值共に統一なく且つ流通區域の限定せられたる藩札に代つて、齊一なる交換手段を提供せることはその一であり、賸貨・惡貨による取引の不安を除去し、新貨幣の不足を補つたことはその二である。而して第三にそれが直接新式企業に投下せられて資本化したこと、及び全國的に流通能力ある貨幣として資本に轉じ得る可能性を持つたことは、特に強調しなければならぬ點である。直接資本化せし例は上述の爲替會社に於ても見られるが、改正以前の國立銀行に就ても同様である。即ち國立銀行は政府紙幣を大藏省に上納して同額の公債證書(六歩利付)を受け、更に之を上納して銀行券を下附せられるのであるから、(かくして發行され得るものは總發行額の六割。他の四割は正貨準備を

要す)、結局に於て銀行は政府紙幣を銀行紙幣に交換して之を發行する、従つて政府紙幣は國立銀行の資本となつた事を意味するのである。斯の如く政府紙幣は直接間接に資本に轉じたのであつて、此意味に於て政府は資本を造出したとも稱することが出來よう。

(二)公債 明治十一年までに政府が發行せる内國債は、新公債・舊公債・金札引換公債・金札引換無記名公債・秩祿公債・金祿公債・舊神官配當祿公債・起業公債の八種であつた。新公債及舊公債は、舊藩主の町人に對する債務を肩替りするために發行せられた交付公債である。之は焦付きとなつてゐた町人の債權を確保し、同時に公債所有者をして利殖を行ひ且つ産業に投下せしむる可能性を與へた。金札引換公債は、太政官札なる政府自らの債務を肩替りするために發行せられたものであるが、やはり新舊公債と同様の意義を持つ。更に秩祿公債以下の三者は、政府が永久に負擔すべき封祿を短期間に支拂ふといふ意味を持つてゐる。之によつて元利の償還てふ一時的でない負擔は依然殘されてゐるが、併しこの公債の交付を受けたものは、將來受くべきものを一時に(割引してではあるが)受けたのであるから、之によつて現在の消費生活に必要以上のものが與へられたことになるのは見易きところである。この意味に於て此等の公債も亦資本に轉化し得る可能性を持つた。最後に起業公債は、我國に於て公募の形式を以て發行せられた最初の内國債であるが、之は二重の意味に於て資本の蓄積に役立つた。民間に於ける餘剩資本が政府の手取金となつて資本家的事業に向つて動員せられたことは其一であり、その代償たる公債證書が動員せられて



資本に轉化せらるゝ可能性を持つたことは其二である。

以上の如き公債の資本化は、條例改正後の國立銀行に於てその著例を見ることが出来る。即ち國立銀行は紙幣發行額の八割に相當する公債を政府に納付し、之と同額の銀行券を受けて發行する(残り二割は通貨を以て兌換準備に充つ)のであつて、結局資本の大部分は公債が用ひられたことになる。殊に國立銀行の設立には金祿公債が多く用ひられたのであつて、左の表によつて之を窺ふことが出来る。

全國々立銀行株主(明治十三年調) <sup>3)</sup>			
株	金	高	百分比
華族	一八、五七一、七五〇圓	四四・一〇二	
士族	一三、四一七、五五〇	三一・八六二	
平民	一、四五一、九五〇	三・四四八	
農民	五〇、一七五	〇・一一九	
民商	六、二五二、七二五	一四・八四八	
雜種	二、三六六、九五〇	五・六二一	
總計	四二、一一一、一〇〇	一〇〇・〇〇〇	

以上各種の内債の外に、明治二年及五年に夫々九分利付外國公債及七分利付外國公債が起された。前者は鐵道敷設資金を調達せるものであり、後者は手取金の一部を以て祿券を買上げ、士族に營業資金を供給する目的を以て起されたものであるが、何れにしても政府の財政的活動が、公債を通じて資本を生み出せる點は同一であらう。<sup>4)</sup>

3) 大日本帝國第一回統計年鑑、278頁

4) 野呂榮太郎氏著、日本資本主義發達史、167頁參照

(木) 租税 以上の如き公債による財政の基礎を鞏固ならしむるために、特に元金償還及び利

子支拂の基礎を固めるために、租税制度の改正が行はれた。その最も著しきものは地租改正である。元年・二年を除き、明治初年に於て地租は歳入總額の約八割を占めてゐた。而して依然現物納制度が行はれてゐたが、之には年の豊凶によつて歳入額に變動あるのみならず、徴税費多くかゝり、又一旦貨幣に代へて支出しなければならぬ不便があつたので、明治六年の條例により改めて金納制度とし、地價に對する百分の三（明治十年百分の五となる）を以て税額とすることとした。

以上要するに我國に於ける資本の本源の蓄積は、先進資本主義諸國に於けるが如く、外國貿易又は植民地の收奪によるところ殆ど無く、主として農民の負擔に於てなされしものであつた。諸侯の蓄積・町人の商業及利貸資本の蓄積は言ふに及ばず、明治政府による資本の造出活動も農民を基礎とせしものであつた。而して封建時代に於けると同様に、維新以後に於ても政治的支配者の作用——經濟外的勢力——が資本蓄積の槓杆となつたことは、我國資本主義成立過程の一特徴である。

### 三、勞働者

(イ) 工場労働者の一源泉として、西洋に於ては手工業者が擧げられてゐる。我國に於ても都市には多くの手工業者があつた。併し彼等の製出するところは奢侈品の部類に屬するもの多く、生

活必需品例へば紙・蠟・木綿等の製造は大部分農家の副業であつた。従つて都市手工業者の多くは維新後も生活様式に急激なる變化無き限り依然存續し得たのであつて、この方面よりの労働者の供給には大なる重要性を認め得ない。

(四)工場労働者の源泉として更に祿を離れた士族が考へられる。彼等のうち下級のものは、既に江戸時代から生活維持のために内職を行ふものが多かつた。所謂家中工業之であつて、大聖寺の絹織物、米澤の木綿織物、岐阜の傘・提燈等、家中工業によつて其發達を促がされしもの少なからず、郡山の金魚養殖業の如きも家中の内職として始められたものであるといふ。明治維新後封祿の削減によつて彼等の生活は更に困難となり、各府藩縣に於ては頻りにその歸農商を獎勵した。政府の祿制整理により彼等は公債證書を貰ひ、地租改正の際には屋敷地に對する地券を受けたが、その一部は從來の債務の支拂手段に供せられ、又他の一部は消費貸借の擔保として高利貸にとられた。斯くて小祿の士は無產者とならざるを得なかつたのである。

適々政府は多くの官營模範工場を建てたが、之は殖産興業政策の一面であると共に、無產士族救濟政策の一面でもあつた。例へば明治五年富岡製絲場を設けて各府縣より製絲工女を募集したが、此際政府は此等の工女を大概士族の子女より選拔したものであつて、「大久保利通公傳」には『皆國家奉公の志を抱きて郷關を出で、其數は實に千を以て算するに至れり。後年地方製絲の業大に改良せられ、今日の盛況を見る』云々と記されてゐる。其他官營工場の職員・職工となるもの

が相當多かつた。<sup>6)</sup>

併し乍ら官營模範工場が飽迄模範工場であつて、企業利潤そのものを目的としたものではなかつたと同様に、士族出身の労働者も單なる労働者としてではなく、技術傳習生を以て遇せられ、事實その傳習生たるの役割を演ぜし場合が頗る多かつた。況んや士族中には公債を以て新企業に參與するもの、官公吏或は學校教員に任ぜらるゝもの等が頗る多かつたのであるから、所謂封建家臣團の分解は、本源的蓄積過程に於ける労働者造出の過程に重要な役割を演じたかどうか、一考を要する。

(ハ)西歐殊に英國に於ては、資本主義の發生過程に於て既に土地を追はれた農民多く、此等が直ちに資本主義的産業に労働者として用ひられた。我國に於てはどうであつたか。

江戸時代の農民は、生かさぬやう殺さぬやうといふ範圍内で生存權を與へられ、そこに土地兼併が行はれて小作人階級も發生したが、維新當時には自作農が全農民の大部分を占めてゐた。其後明治五年五月土地永代賣買禁止令が解かれ、共有地の私有化が計られた結果、農民の土地を離れる可能性が増加した。之を大規模化したのが地租改正である。この改正によつて土地の私有權が確立し、小作人に對比して土地所有者の利益は頗る保護せらるゝことゝなつたが、其反面に所有權を失はしむる可能性も増大した。即ち改正の一大眼目たる貢租の金納は、農産物の商品化を促し、物價の變動を特に不利益とする農家經濟を價格經濟に引入れたからである。<sup>7)</sup>而して之を如

6) 吉川秀造氏著、士族授産の研究、229頁以下

7) 平野義太郎氏著、日本資本主義社會の機構、23頁以下參照

實に發現せしめたものは西南役後のインフレーション及び之に續くデフレーションであつた。即ちインフレーション時代には殊に農産物價の騰貴著しく、従つて農村の購買力増大し、都市にも好況を齎したが、併し其間に行はれた借金を以てする土地の購入並に奢侈生活は、次のデフレーションに際して直ちに農民の生活に對して惡影響を及ぼさずには置かなかつた。我國に小作人が急激に増加し、土地が大地主に集中せる第一段は、實にこの時期に屬する。

小農民の生産手段の喪失は彼等の無產者化を意味する。而して此等の無產者は、土地に對する愛着心の故に、又男工の勞働力を要すべき重工業の未發達の故に、直ちに離村して勞働者と化するといふ事はなかつたが、彼等の一部即ち女子は、デフレーションの終焉を境として一時に勃興せる綿絲紡績女工となつた。否諸々の紡績工場は此等の女子を目當てに起されたと考へられるのである。従つて地租改正は、我國に於ける農村の階級分化及び工場勞働者の造出に大なる役割を演じたものと言はなければならぬ。但し例へば八木澤善次氏の如く、明治十六年より十九年に至る農家戸數の減少五十一萬八千餘戸が、直ちに都市勞働者となつて離村したものか<sup>8)</sup>一考を要する。蓋しこの數字に疑點あるのみならず、農民の北海道移住並に布哇移住を考慮に入れなければならぬからである。

#### 四、企業精神

- 8) 八木澤善次氏、西南戰役後のインフレーション(經濟史研究、第三十二・三十三號)及、明治初年のデフレーションと農業恐慌(社會經濟史學、第二卷三號) 參照  
9) 八木澤氏、前掲論文(社會經濟史學、第二卷三號、54-55頁)

以上述べしが如く、資本の蓄積と、之を資本主義的産業の生産部に投ずるための前提要件たる労働者の発生との間には、多少の時間的隔りがあつた。私見によれば生産部の資本主義化は、多数の例外はあるが、明治十八、九年即ち紙幣整理が一段落を告げた頃から活潑になつたものである。従つて労働者造出過程を必然的に伴ふ資本の本源の蓄積は、其頃から始つたものと考へられる。併し乍ら流通部に於ける資本主義化はそれ以前に始つた。爲替會社・通商會社の如き金融機關、廻漕會社・日本鐵道會社等の交通機關（嚴密なる意味で交通業は生産部に屬すべきものであるが、工業と區別する意味で便宜上金融業と併せ述べる）の資本主義的經營がそれである。前述の如くにして蓄積せられた資本が如何にしてこの方面に動員せられたか、換言すれば企業精神が何處から生じたかについて一言しよう。

最初に述べしが如く町人の間には企業精神は容易に起らなかつた。通商會社・爲替會社の資本は主として町人の資本から成つてゐたが、それは自發的に醸出せられたものではなく、政府の勸奨に基くところであり、實際の運営に當つても士族出身社員に俟つところが少くなかつた。<sup>10)</sup>之に就て例へば加藤祐一氏は『大阪は人氣のすゝみ至ておそし、日本國中に大商富家の多く集りたる地は大阪に超たるはなき程なれども、交易に人氣のすゝまぬは、交易はしてもせいでも是迄の産業にて十分なりとて、手出しをせぬ人、或は新規の事に手出しするは家風になき事なども、姑息なる論をたてゝせぬ人などある故也』<sup>11)</sup>と述べてゐる。澁澤榮一氏が官途を退いて實業界に身を投

<sup>10)</sup> 菅野博士著、日本會社企業發生史の研究、605頁以下

<sup>11)</sup> 交易心得草、前編、28丁。

じたのも、當時の町人に企業心乏しかりしを慨してである事は、次の言葉によつて明かである。

『此の末、政府に於て如何程心を砕き力を盡して、貨幣法を定め、地租率を改正し、會社法又は合本の組織を設け、興業殖産の世話があつたとて、今日の町人では到底日本の商工業を改良進歩させることは成し能はぬであらう。就ては此の際自分は官途を退いて一番身を商業に委ね、不及ながらも率先して此の不振の商權を作興し、日本將來の商業に一大進歩を與へようといふ志望を起しました』<sup>12)</sup>

農民の間にも豪農があつたが、彼等に企業心が養成せられてゐたとは更に考へることが出来ない。企業心は士族に於て最も盛んであつた。これは士族出身者を以て構成せられた維新政府を見ても、明治初年の資本主義的企業を見ても明かに看取せらるゝところである。岩倉公は『士族は積世涵養の力を以て其精神を發揮し、百科に進むに足り、其志行を奮勵し、以て艱苦に耐ゆるに足り、其氣力を旺盛にし以て外人と競争するに足る。今の現況に據るに學問百科凡そ以て國の事業を進歩せしむべき者、士族の性尤も近き所とす。(中略)此高尚なる種族を除く外の人民をして、其れ能く進取有爲の地に進み、外人と競争するに足るの日を待つは、猶二三十年の後に在るべし』<sup>13)</sup>と述べてゐるが、誇張の嫌ひなきに非ざれども正鵠を失したものだといへないであらう。

然らばこの企業心は如何にして養成せられたか。將軍吉宗の洋書解禁以來西洋の新知識が普及したのは主として武士階級であつた。殊に下級の武士はその生活を維持するために何らかの轉換を要求してゐたから、實踐的に洋學を研究した。其成果が明治維新の指導精神となつて現はれ、明治政府の殖産興業政策となつて現はれたのであるが、その事實は既に江戸時代にも存した。幕

12) 青淵先生六十年史、第一卷、434-435頁  
13) 岩倉公實記、下卷、548頁

末に於ける諸藩の洋式工業はその顯著なるものである。洋式工業の内には軍備自體を目的とせるものが多かつたが、例へば鹿兒島藩の紡績事業の如く西洋綿絲の輸入を未然に防がんとして起されたるものあり、更に佐賀藩が英國資本と共同して炭坑開發を企てしが如きは、<sup>14)</sup>企業心が武士階級の間に如何に旺盛なりしやを示すものであらう。即ち江戸時代經濟的に壓迫せられてゐた武士階級の間には、その壓迫を契機として徐々に企業心が養生せられてゐたのであつて、この意味に於て我國資本主義の萌芽は既に江戸時代に存したのである。

政治の局に當らなかつた士族の一部は身を翻して實業界に投じた。積極的に活動し得なかつたものは路頭にさまよふが如き有様となつたが、同じく生業に就くならば、町人百姓が未だ手を着けてゐない産業にといふわけで、新しい産業、新しい經營に向つて進んだ。それ等は多く失敗したにせよ、企業心を、具體的には例へば會社企業を、一般國民の間に振興する上に於ては多くの貢獻をなした。<sup>16)</sup>岩倉公が士族のみに企業心ありと斷じたのは、當時の情勢よりして決して間違ひではなかつたと思はれる。

## 五、生産技術及市場

資本主義經濟殊に生産部面に於ける資本主義化の他の重要なる前提條件は、生産技術の進歩及び市場の形成である。

14) 松尾音次郎氏著、我國商工業の現在及將來、63-64頁

15) 江頭恒治氏、高島炭坑に於ける日英共同企業(日本經濟史研究所編、幕末經濟史研究收載)

16) 高橋龜吉氏著、前掲書、104-108頁。菅野博士著、前掲書、659頁以下。吉川秀造氏著、前掲書、367-371頁



資本主義的經營に適用し得べき生産技術は我國に於ける固有の發達を待つべき餘裕なく、従つて先進國から移植されねばならなかつたが、其事は幕末に於て既に行はれた。幕府及び諸藩に於ける洋式工業の創始之れである。維新後に於ても諸々の新工業技術が移植せられた。併し此事が幕末に於ても明治初年に於ても、若干の例外はあるが主として爲政者によつてなされたことに注意すべきである。之が行はれたのは軍備充實或は殖産興業の意圖の下に於てであるが、そこには前述の如き資本の蓄積と企業精神とが存してゐた事を併せ考へなければならぬ。

明治維新後新工業は民間に於ても企てられたが、その製品を需要すべき市場の状態はどうであつたか。當時市場として重要なものは政府自身及外國であつた。例へば製紙業は地券紙・葉書用紙等の抄造にその存立を維持せし有様であり、硫酸工業は造幣局・印刷局等に需要せらるゝ外は大部分支那に輸出せられ、燐寸工業の如きも寧ろ支那市場によつて其發展を確保せられしものであつた。近代的製絲業も亦米國市場を目的とせるものである事はいふ迄もない。之に對して國內一般市場は、廢藩置縣其他封建的諸制限の撤廢政策によつて徐々に形成せられ、地租改正による貨幣經濟の急激なる農村侵入、並に西南戰爭後のインフレーションによつて之を促進せられつゝあつた。併しこの市場を利用したものは寧ろ先進國の工業であつた。例へば綿製品の如きそれであつて、之を驅逐するために特に政府の紡績業振興策が採られたのである。

斯の如く考ふれば、明治初年に於ける我國の新工業の發展は、市場の點より大なる制限を蒙つ

てゐたものであつて、新技術は既に早く移植せられてゐたにも拘らず、それが獨自の需要の側に於ける基礎を持つたためには尙は多くの努力が必要であつた。この努力は明治の初めの十數年間、主として政府によつて致され、流通部面の資本主義化によつて補はれたものであつて、従つて生産部面に於ける資本主義化が堅實なる歩みを運び得るに至つたのは、紙幣整理終了後であると見るべきであらう。之には前に述べた勞働者の發生過程をも併せ考ふべきであることはいふ迄もない。

## 六、結 言

以上資本主義經濟の諸要素に着目して、大體紙幣整理終了頃までの我國資本主義の狀態を述べた。之を要約すれば第一に資本の蓄積は經濟外的勢力によつて、而も爲政者の財政活動を通じてなされた割合が頗る大であつた。町人の商業及利貸資本の蓄積も、それは多く封建諸侯の財政的活動に依存せるものであつた。第二にこの蓄積過程に於て農民は犠牲に供せられ、他日彼等が無産者化すべき素地が醸成せられてゐた。第三に企業精神は町人の間に於けるよりも寧ろ舊武士階級の間に生育し、之が資本と結びついて諸々の資本主義的企業が出現した。而して第四に新工業技術は早くより移植せられてゐたが、市場の狹隘の故に生産部面の資本主義化には若干の年月を要した。

要するに我國に於ては、外國貿易又は植民地の收奪による資本の蓄積が貧弱であつたため、政府自ら資本を動員しなければならなかつた。同様に資本主義の指導者も經營の擔當者も舊武士階級に俟たねばならなかつた。従つて江戸時代の政治的支配階級は維新後經濟的支配者なり、かくて本來の町人階級が資本主義の舞臺に乗出さんとすれば、此等の武士階級と結合する必要があつた。この結合自體は既に江戸時代より行はれたところであるが、維新後には資本と政權との結合として益々發展することゝなつた。こゝに我國資本主義成立過程の一特徴がある。更に資本の蓄積は上述の如く主として農民の犠牲に於てなされ、特に地租改正以後彼等の間からも資本家が發生し得ることになつたと同時に、小農民は相對的に愈々資本主義の發達から取殘されることゝなつた。即ち日本資本主義は國內農民の犠牲に於て成立せる點に第二の特徴を持つ。最後に日本資本主義は、幕末に於いて先進資本主義經濟と直面することによつてその成立を促され、之も亦その成立をして天降りのものたらしめた一の原因であるが、或は資本の蓄積に於て、企業精神の生育に於て、貧弱乍らも維新以前既にその成立の基礎を持つてゐたことを附言したい。而してこの基礎の貧弱も亦資本主義を政治的に育生しなければならなかつた一原因であるが、政治的なあらゆる努力にも拘らず、流通部面の資本主義化と生産部面のそれとの間には一の段階が存したのであつて、従つて明治十八九年以前の日本資本主義は、資本主義の全面的發展への準備時代と見ることが出來よう。